

京都大学	博士（文学）	氏名	満原 健
論文題目	西田幾多郎の超越論主義とフッサールの超越論的現象学		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>西田幾多郎は、主著の一つ『働くものから見るものへ』（1927年）で「場所」と言われる立場を確立するが、それ以降、あらゆる哲学上の問題をこの立場から説明しようと試みる。本論文は、西田が「場所」に到達するまでの思想の展開に注目し、その考察を通して西田の哲学の根幹をなした「場所」の意義を明らかにすることを目指す。</p> <p>西田の「場所」の意義について検討した先行研究は、既に多数存在する。しかし西田哲学が生まれた当時の国内外の思想状況を詳細に論じ、哲学史的側面を浮き彫りにしたものは見当たらない。本論文は、当時の学界において影響力をもっていたヴントや新カント学派、フッサールの哲学を主に取り上げ、それらを受容した西田哲学の内実の解釈を進めてゆく。その基調をなすのが、フッサールと西田の比較研究である。</p> <p>ほぼ同時代を生きたフッサール（1859-1938年）と西田（1870-1945年）は、多くの共通点を有するが、第一に、初期に心理主義的な著作を執筆したことが挙げられる。また両者とも、その後は心理主義に批判的な超越論主義へと移行している。フッサールは、『論理学研究』（1900年/1901年）や『イデーニI』（1913年）で取り組んだイデア的なもの、超時間的なものが、どのようにして認識可能となるのかという問題に取り組んだ。西田も『自覚に於ける直観と反省』（1917年）や『働くものから見るものへ』を通して、同様の問題に関心を向け格闘している。思想傾向の共通性は、その他の多くの点に認められるが、もう一例として、主観と客観の相関関係への注目に言及しておく。このような共通性を基盤とした上で、西田哲学の独自性とその意義を、フッサール哲学との対比から引き出すことが、本稿の目論みである。</p> <p>第1部では、初期西田および初期フッサールが、両者共に心理主義的立場にあったこと、またその後各自がそこからの脱却を目指したことを明らかにする。第1章で扱われるのは、哲学の没落とそれに代わる自然科学の信頼獲得という学術的史的特徴、そしてその時代を生きた、ブレンターノとヴントによる新しい心理学の展開という問題である。二人は心理学を科学化することで、哲学を基礎づけ、哲学の信頼回復を企図した。</p> <p>このような哲学史的背景を押さえたところで、第2章では、ブレンターノのフッサールへの影響に注目する。フッサールは、初の著書『算術の哲学』（1891年）で数学の基礎を心的作用に求めたという。一方で西田は、ヴントからの少なからぬ影響のもと、第一の著作『善の研究』（1911年）を著したのだ。本書で説かれた「純粹経験」論とヴ</p>			

ントの哲学は、存在論的にはいずれも観念論、主意主義、活動説と見なすことができる。しかし認識論的には、主客未分の経験を直接の知の成立状態だとする立場は共通しているが、「純粹経験」（西田の主要概念）を一の自発自展的活動だと見る西田は、ヴントと一線を画す。

続く第3章では、当時の心理主義批判の状況を確認する。『算術の哲学』刊行後、フッサールは主にボルツァーノとロツツェの研究に専念し、心理主義の問題点に気づき、イデア的なものの基礎を実在的なものに求めることはできないとの考えに至ったのだ。19世紀終盤、特にロツツェの影響を受けた新カント学派も、心理主義批判を展開。心理主義と超越論主義、もしくは論理主義の対立が見られた。

新カント学派およびフッサールによる心理主義批判に触れた初期の西田は、自らの思想をどう評価したのか。第4章ではこの問題を扱う。『善の研究』の立場は、あらゆる知識の基礎、真理の基準は「純粹経験」にあると主張する点で、心理主義的だと解釈することができる。だが西田の論述には、『善の研究』は超越論主義に立つのであり、心理主義的と見るのは誤解なのだという主張が読み取れる。また一方で、知識の基礎はむしろ経験を統一するアプリアリにあると主張し、この点から自分の立場が超越論主義と親和的であることを示す。ただしこの時期の西田は、心理主義批判の意味を誤解しているため、未だ心理主義を克服したとは言い切れない。

第2部では、超越論主義を採用したフッサールと西田における、超時間的なものの認識可能性という問題が検討される。

この問題は、フッサールの『論理学研究』で論じられた論理学および認識論の新しい基礎づけとしての現象学において、主題的に扱われている。第5章ではまず、『論理学研究』第二巻において、超時間的なものがカテゴリー直観あるいは一般者の直観によって認識可能となると結論づけられていることを示す。『イデーニI』では、超越論的意識のアプリアリな構造が分析され、その結果、超時間的なものは本質直観によって認識される、しかもそれは原本が十全に与えられているゆえに、真実に存在すると主張される。

第6章で検討されるのは、純粹経験の立場はどのように「自覚」の立場（『自覚に於ける直観と反省』）に転じたのかという問題だ。「自覚」の立場によれば、超越論的自我の「自覚」にすべての知識の基礎がある。ここで超越論主義へ移行したと言える。しかし同時に「自覚」は、実在あるいは認識の形式としての一の自発自展をも意味する。この点では、西田の哲学は変化していないとも言える。

西田は『自覚に於ける直観と反省』で、フッサール同様、超時間的なものの認識可能性について問う。第7章における関心は、次の点に向けられる。超時間的なものと時間的なものとの峻別を説き心理主義を批判したリッカートによれば、超時間的なものの認識可能性は解決不可能な問題である。これに対して西田は、この問題の解決を通して、自分の哲学の正当性を主張しようとしたのである。西田はおそらくそれと気

づかずに、フッサールと同じ方向で、超時間的なものの思索を深めていった。また西田にとって、超越論主義と論理主義の統合、認識の世界と体験の世界との結合のような哲学の動向において、フッサールは最先端を行く哲学者であった。彼の哲学には、「現象学的還元」を経た後に開示される「純粹意識」と哲学的懐疑に耐える純粹経験が同一の事象を指している点、さらに超時間的なものが意識に内在すると考えられる点、主観と客観が相関関係にあると見なされる点などから、西田哲学との共通性を認めることができる。おそらくそれゆえに、西田はフッサールの哲学を手掛かりとして問題の解決を目指したのであろう。

第8章は、前章で掲げた問題に対する西田の探究と回答がいかなるものであるかを明らかにする。西田の当初の理解は次の通りであった。超時間的なもの(客観)と時間的なもの(主観)は一つの実在における二つの契機として結合している、しかしこの実在がそのような二つの異なる方面から見られることで、超時間的なものが時間的なものとは無関係に独立しているのである。だが、それらの方面はどのように結合されるのか。「自覚」の立場からはその答えを得ることができなかった西田は、フッサールの哲学が唱えた、自然的世界と算術的世界は共にデカルト的コギトに含まれるという考えに手がかりを求めた。この結合の問題は、さらに「絶対意志」の統一によりなされるとの見解に至る。しかし「絶対意志」の立場も、この問題に完全な解答を提供してはいない。「絶対意志」が超時間的なものであり、時間的なものをも対象とするのであれば、なぜそのようなことが可能なのか、超時間的なものと時間的なものの結合はいかにして可能となるのかという当初の問題が再び浮上する。さらに言うなら、西田は相変わらず時間をリッカートらとは異なる意味で捉えていた。したがって「絶対意志」の立場が心理主義を克服したとは言い難い。

最終の第3部では、以下の二点を巡って考察が深められる。西田が成し遂げた「場所」という独自の論理の確立によって、西田哲学は以前の立場からどのように変転したのか。また「場所」の立場は、心理主義の克服、超時間的なものと時間的なものとの結合という二つの問題をいかに解決へと導いたのか。

第9章は、「自覚」や「絶対意志」から「場所」への移行が、論理の包摂関係による直観主義の論理的基礎づけを通して実現したことを説く。『働くものから見るものへ』の前編では、プロティノスによる時間の理解が受容され、意志作用は時間的であり、その背後には超時間的な直観する「場所」としての主観があるのだと理解される。後編では、この見方に論理的包摂関係が適用され、その拡張によって、意識とその対象も一般者と特殊の関係性の中で捉えられるようになる。その後『一般者の自覚的体系』(1930年)で、意識は、論理的包摂関係の極限にある「超越的述語面」と、その基礎にある知的直観の一般者とに区別される。そして、意志作用は「超越的述語面」に「於てある」ものとして、超時間的な直観する「場所」としての主観は知的直

観の一般者として、捉えなおされた。以上のように、直観主義の論理的基礎づけが達成されたのである。

続いて西田は、この「場所」の超越論主義を手がかりとして心理主義を克服し、そして超時間的なものと時間的なものとの結合を説明するに至る。第10章の目的は、「場所」の立場の特徴をより詳細に描き出すことである。西田は、リッカートらのように変化するものを時間的なものと理解するようになる。その限りにおいて、超越論的主観は時間的な作用とは異なる「場所」としての知的直観の一般者であり、認識の形式は論理的包摂関係に基礎をもつ「一般者の自己限定」なのである。また、アプリアリナ知識はその知的直観の「一般者の自己限定」に基礎をもつと主張される。このように、西田の「場所」の立場は、論理的包摂関係によってアプリアリナ知識が基礎づけられるという意味での超越論主義となり、心理主義を克服するに至ったと言える。

さらに西田は、論理的包摂関係を拡張することで、意識を「無」と捉える。西田によれば、超越論的主観は、「真の無」という一般者、つまり通常の意味での一般概念では規定できないものが「於てある場所」と捉えられる。時間的な作用としての意識、および超時間的な対象、このように互いに矛盾するものがそこに「於てある」。超時間的なものと時間的なものは、この「真の無」によって媒介され関係づけられている。このように、「場所」の立場から二つの問題を解決することで、西田はリッカートらに反論し自らの立場を保持することができた。「場所」の立場の意義はここにあると言える。

最終章では、1920年代の西田によるフッサール批判を検討することで、「場所」の超越論主義の内実が明らかにされる。意識の志向性は「真の無」の「場所」が可能にすると考える西田にとって、志向性が超時間的なものと時間的なものを結びつけると見るフッサールの現象学は、不十分なものでしかない。一方、フッサールからすれば、論理的包摂関係の拡張に基づく「場所」は、認識の正当性は原本的に与える直観にあるという「原理中の原理」に従っておらず、説得力に欠ける。しかしその西田の思索には、まさに「原理中の原理」から外れているがゆえに、「真の無」の「場所」という、対象として現れず現象学が扱うには困難な超越論的主観を議論の俎上に載せる可能性が認められる。ここに、超越論的現象学に対する、「場所」の超越論主義の特徴を見ることができる。

以上の考察から明らかなように、西田（『一般者の自覚的体系』まで）とフッサール（『イデーニ I』）は、思索を深めた学術的文脈、哲学的立場、関心を向けた問題など多くを共有していた。西田の「場所」の立場における超越論哲学の最も優れた特徴は、論理的包摂関係を主客の関係へと拡張し、超越論的主観を「真の無」の「場所」と解釈したところにある。西田の思索は、フッサールの現象学が解明しきれなかった超越論的主観を論理的に究明する可能性を提供し得たのである。

(論文審査の結果の要旨)

フッサール(1859-1938年)が創唱した現象学は、1910年代から戦前戦後を通し、さらに現代に至るまでの日本の哲学の成長と豊かな展開に、決定的な役割を果たした。現象学の日本への最初の紹介者と目される西田幾多郎(1870-1945年)にとって、フッサールの現象学は、彼の第一哲学、「純粹経験」の行き詰まりから脱却を図るための、有力な導きの糸の一つであったのだ。しかしこのこと自体、日本哲学あるいは現象学の研究者の間の通念となっていない。西田とフッサールの思想的類似やその比較に関心を向ける両分野の研究者は数多いものの、例えば、フッサールの意識の志向性を記述する対概念「ノエシス」-「ノエマ」の西田による換骨奪胎を認め、それを概説するという扱いにとどまっている。

本論文は、西田とフッサールの哲学の内実に踏み込んだ検討を加えるために、まず両者の思想傾向の共通性を念入りに主張することから始める。これは、本格的な比較研究は両者の前期哲学の丹念な突き合わせを抜きにしてはなし得ないという、満原氏の確信に基づくものだ。その根柢には、19世紀後半のドイツで主流となった「心理主義」の問題に焦点を当て、それを巡る両者の過渡的思想を丁寧に解釈し明確化するという満原氏の目論見がある。このような方法による研究は、実は日本の現象学研究史の起源に遡る基礎研究であるはずだが、未だ存在しない。その意味で本論文の構想には極めて重要な価値がある。

西田哲学の根幹をなす立場は「場所」と言われる概念であるが、『働くものから見るものへ』(1927年)においてまずその基礎が作られた。本論文の目的は「場所」の生成過程を考察し、その意義を明らかにすることにある。そして西田の「超越論主義」とフッサールの「超越論的現象学」との対比を通じて、『善の研究』(1911年)から『一般者の自覚的体系』(1930年)までの約20年間にわたる、「場所」の立場確立までの西田の思索の深まりが詳細に特徴づけられてゆく。

西田の『善の研究』とフッサールの『算術の問題』(1891年)は、両者共に心理主義的立場に立つものであったが、後に脱却へ向かった。第一部では、この本論文独自の見解が、19世紀ドイツの思想史的状況(哲学の権威喪失、自然科学の学問モデルへの昇格)をふまえた上で示される。布伦ターノとヴントは、心理学の科学化により哲学を基礎づけることで、哲学の信頼回復を企図した。学術の新局面で重要な役割を担ったこの二人の哲学者は、それぞれフッサールと西田の心理主義に無視できない影響をもたらした。本論文はこの点に注目する。まず『善の研究』で説かれた「純粹経験」論は、通説のジェームズよりむしろヴントの哲学から多くを継承していることを、文献の精査により実証する。この作業は西田哲学研究において未踏の部分である。本論文の読解によれば、西田とヴントの認識論的理解には、主客未分の経験を直接知の成立状態だと見る共通性がまずあり、同時に、西田独特の一の自発自展的活動としての

「純粹経験」とヴントの個別的「直接経験」の相違も認められるという。本論文はまた、ロツツェなどに影響を受けたフッサールや新カント学派による心理主義批判、心理主義と超越論主義あるいは論理主義との対立関係などを丁寧に論じる。『善の研究』は、1912年、高橋里美の批判にさらされるが、直後より西田は、心理主義批判の問題を敏感に自らの思索に反映させてゆく。

第一部の特筆すべき点は、フッサール-西田を軸とした近代哲学史という体裁をなしていることだ。19世紀ドイツにおける哲学、心理学、数学、自然科学という学際知の詳しい相関関係が、また一方でドイツを中心とする西洋の哲学、心理学、科学的心理学を受容した19世紀終盤-20世紀初頭の日本の帝国大学の知的活動状況が、見事に描き出され、読み応えのある一部に仕上がっている。フッサールと西田の思想背景を丁寧に連関させることで、比較哲学のいくつもの課題が浮き彫りにされている。

第二部は、両哲学者が心理主義の克服に向けて採用した超越論主義という課題に焦点を当て、超時間的なものの認識可能性という問題を設定する。満原氏はテクニカルな概念が頻出するフッサールの難解な原著を精読し、超時間的(イデア的)なものとの時間的(個別的、実在的)なものとの区別、超越論的意識のアプリオリな構造の分析、またそこから引き出される本質直観により認識可能となる超時間的なものなどを手際よく解説する。一方本論文は、純粹経験から転じた西田の「自覚」の立場を「超越論主義」と呼ぶ。それは、一の自発自転としての実在と認識の形式を維持した、心理学的ではなく超越論的自我の「自覚」である。以下は本論文による解釈である。『自覚に於ける直観と反省』(1917年)で西田はフッサールを導きとし、超時間的なものの内在化とその認識可能性の問題に取り組む。超時間的な客観と時間的な主観は、実在の二つの契機として結合するが、いかに結合するかは「自覚」では説明できず、新たな立場、「絶対意志」(経験全体の統一作用)に可能性を求めた。「絶対意志」において矛盾の統一は体験されるが、その理由は説明できない。西田の探究の確実な成果は、ここでは報告されなかった。しかし第二部における西田の現象学理解およびフッサールとの比較に関する詳細な解説は、先行研究には見られぬ一つの優れた成果である。

最終の部では、西田独自の包摂論理として構築された「場所」が、心理主義、超時間的なものと時間的なものの結合という二つの問題を、解決へ導くことが論じられる。『働くものから見るものへ』ではまず、プロティノスの時間の観点から、意志作用の背後に超時間的な直観としての「場所」があるとされる。この見方に「場所」の論理的包摂関係が拡張され、そこで意識とその対象も捉えられた。『一般者の自覚的体系』では、「場所」による直観の論理的基礎づけが完成する。そして論理的包摂関係によりアプリオリな知識も基礎づけられ、その意味において「場所」は超越論主義となり、心理主義から脱却できた。西田はまた意識を「無」と捉え、「真の無」を通常の意味の一般概念では規定できないものが「於てある場所」なのだとした。「場所」には、互いに矛盾するものも「於てある」。ゆえに時間的な作用としての意識も

超時間的な対象もそこに「於てある」と説明される。超時間的なものと時間的なものは、このように「真の無」によって関係づけられる。フッサールの言う「原理中の原理」に従わぬ「真の無」の「場所」は、対象として現れず現象学には扱えない「超越論的主観」を、論理的に究明する可能性を具えている。現象学に対する「場所」の際立つ特徴はここにあると、本論文は最後に主張する。

すでに述べきて分るように、本論文には著者の実力が十分に発揮されている。しかし再検討すべき課題も残されている。「超越論主義」が西田の文脈に従ってきちんと規定されぬまま論じられていた点、「超時間的」と「時間的」の意味の説明が不十分で曖昧さが残った点である。しかしそれらは、先駆的なテーマを扱った本論文の価値を何ら否定するものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2023年10月26日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。